Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法――

子どもを養い護ることが親の一番大事な役割です

日蓮宗忠安寺住職
進藤義遠さん

第85回

しんどう・ぎおん　1947年生まれ、山梨県出身。立正大学仏教学部卒業。1975年4月、旧・若草町（現・南アルプス市）の玉泉院住職に。同年9月、忠安寺の住職となり現在に至る。日蓮宗信行道場や日蓮宗布教研修所にて後進の指導教育も担当。著書に『プンダリカ』（山梨ふるさと文庫）、『ATD アフター・ザ・デイ～25年後の君たちへのメッセージ～』（オズ プリンティング）ほか。

私は甲府の生まれ。もともとお寺のせがれではありません。仏教にはまったく縁なく育ちました。身延山短期大学から立正大学に3年次編入しましたが、お坊さんになるつもりはさらさらありませんでした。ところが、卒業を間近に控え、進路に思い悩んでいたとき、どういうわけか私を弟子にしてくれるという人が現れたのです。私はその方の弟子になり、お坊さんになることになりました。

その後は玉泉院の住職を経て、忠安寺の住職に。ありがたいことに、この寺にご縁をいただいてもう42年になります。

塾や学校、布教をとおして子どもたちを教育する立場に

忠安寺ではまず最初に学習塾を開きました。小学4年生～中学3年生まで、多いときは70～80人くらいの子どもたちが集まりました。今、当時の子たちは40～50代になり、一家の当主に。いまだに親御さんも含めて家族付き合いができる関係です。地域の方たちとのコミュニケーションをいい形で作ることができ、私にとって大きな財産になりました。

1982年からは身延山久遠寺で寮監を務めました。当時はお寺で寝起きして学校に通う学僧が100人近くいました。その子たちの教育管理が仕事です。3年間務めた後、今度は身延山高校の非常勤講師になりました。書道や社会などの教科を担当したほか、事務としても勤務。長い時間を子どもたちと過ごすことになりました。

その後もさまざまなご縁をいただき、お坊さんを育てる日蓮宗信行道場や布教研究所の主任として子弟教育に携わってきました。

「教育」よりも大切なのは「養護」です

長年、いろいろな立場で教育に関わってきて思うことがあります。今、教育に足りないのは「養護」です。親の一番大きな役割は子どもを「養う」こと、そして「護る」こと。教え育てるのはその後です。でも、今の社会では一番大事な「養護」が欠けてしまっています。

現代は女性の社会進出が目覚ましく、子どもが小さいうちから保育園に預けて職場復帰する人が増えました。子どもにしてみれば、頭をなでられるのも尻をつねられるのも保育園の先生。小学生になれば今度は学童保育です。親はどこで怒っていいか、どこで褒めていいかわからないまま、子育ての真似事をすることになります。これでは「養う」「護る」ことにはなりません。

家庭の事情や各人の考え方もあるでしょう。核家族化が進み、経済主導型の社会ですから仕方のない部分もあります。しかし、教育に関しては少しシフトダウンすることも必要だと思います。子どもを育てることは女性にとって大きな資産。それを失うことのないよう、「養護」の大切さに気づいてほしいと思います。そうすればきっと良妻賢母になれるはずです。

1100年代に真言宗の寺として開山した忠安寺。
1600年ごろより日蓮宗の寺院に。
忠安寺／山梨県甲斐市西八幡311

撮影／広瀬壮太郎　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻